

河内小だより

平成22年12月3日 No.36

子どもは大人の鏡，まずは隗より始めよ。

武庫川女子大学教授 河合 優年

子どもは生まれたときは白紙であるという考え方に従うわけではないが、彼らは自分を取り巻く環境とのやりとりのなかで、世の中というものはこのようなものであるとか、このようにするとよいのだというようなことを学習してゆく。その意味で子どもの姿は大人の世界を反映したものである。私が少し年をとり始めたせいかもしれないが、最近気になることが増えてきている。

第一の問題点は、子どもを取り巻く世界の「声の無さ」である。声は文字通りの声だけでなく、行動というものも含んでいる。街角で子どもたちが明らかに社会的に望ましくない行動をしていても、多くの大人は「声を出すこと」はなく、見て見ぬふりをする。むしろかわりを持たないようにしているのではないかとさえ思える。

見ず知らずの子どもであるからという思いがあるかも知れないが、「声」は家庭においてさえも消えつつあるように思える。ファミリーレストランで子どもたちを傍らに置いて携帯メールに夢中になっている親の姿は当たり前のようにになっている。懐古的かも知れないが、かつては食事が運ばれてくるまでの間、わくわくした気持ちで会話が弾んだものである。

もう一つの点は、何が子どものためなのかを考えるということである。ほめることが子どもを伸ばすといわれている。ほめることも大切である。確かにほめ言葉は心地よいものである。

しかし、心地よい言葉を並べるだけでよいのだろうか。近頃は「かわいい子には旅をさせろ」という言葉や、「鉄は熱いうちに打て」という言葉を聞かなくなった。むしろ大人が筋道を示して、あたかも「こちらにどうぞ」と言わんばかりに行く路を示している。社会は、自分が思うようにはならないものである。自由は責任と同時に存在している。耐えることを十分訓練されていない子どもたちが、想像していたものと違う社会に出たとき、どのように対処するのか。叱ってほめる、このバランスこそが重要ではないかと思う。居心地のよい環境を追求していく、そのことが子どもの成長に与える功罪を考えるべき段階になったのかも知れない。

いまこそ子どもたちに見せている、もしくは子どもたちが見ている「モデル」としての大人の姿についても一度考えてみる必要があるのではないだろうか。環境が100%であるとは考えもしないが、ルールや価値観は子どもを取り巻く世界、すなわち大人がつくり出している世界が示していくものである。

社会的に望ましい行動は文字で表現できるかもしれないが、その背後にある人間性や感情のあり方は日々の生活のなかで身に付くものである。だからこそ日々の私たち大人の立ち居振る舞いがどうであるのか、子どもの姿を通して見て、もう一度考えてみる必要があるのではないだろうか。

「日本教育 平成22年4・5月合併号」より